

すみだ地域学情報

第31号

発行：墨田区教育委員会（生涯学習課）
〒130-8640 墨田区吾妻橋一丁目23番20号
☎ 03-5608-6309 FAX 03-5608-6411 ☐ syougaigakus@city.sumida.lg.jp

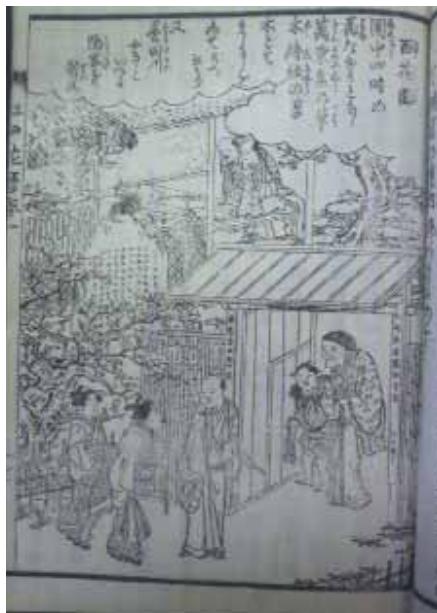
2015年
(平成27年)
1月発行

ふれあい 活力 ゆとり
すみだ

We!



百花園の誕生と向島



この年、鞠塙は骨董商であった頃から愛顧を受けた文人達に梅と漢詩を詠い、集まつた梅は庭に植え、漢詩は『盛音集』として刊行し引出物としています。

鞠塙は43歳、隠居というにはまだ早い歳ですが、出世や商売にあくせくせず風流に生きることは江戸人の夢でした。

向島は名所も多く植栽にも恵まれた土壌だったので、名産寺島

所となり、同年刊行されている式亭三馬の『浮世風呂（四編）』には「和尚が丹精するから、園は備わった。四季ともに景物があるから、百花園と呼んでもなくねへ。」と書かれています。

琳派につながるものに、百花園の隅田川焼があります。京で入手した光琳の弟尾形乾山の陶法伝書によつたもので、文政3年（1820）5月、園内に東竈を開き隅田川の土を用いて焼いた物です。業平の歌で知られる都鳥を写し、万葉の草木を描いた隅田川焼は、たちまち江戸の評判となりました。公家や将

が購入した向島寺島村の旗本賀氏の抱屋敷跡に隠居した文化元年（1804）とされます。

この年、鞠塙は骨董商であった頃から愛顧を受けた文人達に梅と漢詩を詠い、集まつた梅は庭に植え、漢詩は『盛音集』として刊行し引出物としています。

鞠塙をとりまく文人たちは毎日のように足を運び、我が物のように園を造りだします。はじめは植木や池の事からはじまり、大田南畝が花屋敷の扁額を門の上に掲げると、大窪詩仏は門の左右に「春夏秋冬花不斷、東西南北客争来」の聯を掛け、橘千蔭は「お茶きこしめせ梅干しもさむらふぞ」と掛提灯を掲げるといった具合です。文化10年（1813）頃には早くも江戸の名

所となり、同年刊行されている式亭三馬の『浮世風呂（四編）』には「和尚が丹精するから、園は備わった。四季ともに景物があるから、百花園と呼んでもなくねへ。」と書かれています。

百花園の名付け親ともいわれる酒井抱一は王朝の美意識に通じる尾形光琳に心酔し、元禄冬は芭蕉翁の句にあるように雪見にころぶところまで」と、これは三代目尾上菊五郎が寺島に隠居するときの口上の一節です

「春は堤の花盛り、夏は涼みの遊山船、秋は殊更隅田の月、冬は芭蕉翁の句にあるように雪見にころぶところまで」と、これは三代目尾上菊五郎が寺島に隠居するときの口上の一節です

が、向島は、花見や隠居の憧憬の地といふばかりでなく、四季折々の風物を愛する行楽の地となつたのです。明治に至つても、百花園は各界の名士や風流人に愛され、向島は花街やレガッタなど新しい様相を見せながら行楽の地としての賑わいを見せていました。

この頃から百花園といわれるようになつたようです。さらに土産の茶碗の事や『秋の七草考』のことが書かれ、百花園が江戸町人の話題となつていてわかります。

百花園の特徴は、大名庭園をまねのではなく、文人による文人の庭園を創り出した所にあります。百花園の文化年中の広告刷物とされる「隅田川御遊覧の伝手」には「詩経草木万葉集」には「詩経草木万葉集」草木総て園中の草木七百廿種」とあり、園の四季の行事には「小松引きの宴」や「花扇七種」など宮廷の行事が入っています。

百花園の文人達が造つた庭園は王朝の文化教養が基にあります。百花園の名付け親ともいわれた芭翁の句にあるように雪見にころぶところまで」と、これは三代目尾上菊五郎が寺島に隠居するときの口上の一節です

が、向島は、花見や隠居の憧憬の地といふばかりでなく、四季折々の風物を愛する行楽の地となつたのです。明治に至つても、百花園は各界の名士や風流人に愛され、向島は花街やレガッタなど新しい様相を見せながら行楽の地としての賑わいを見せていました。

（墨田区文化財調査員
松島 茂）

掲載絵図：「江戸名所花曆：春」文政10年（1827）（墨田区立図書館蔵）

正月の風習とすみだ

私たち一年の節目である正月を、とりわけ大切にしてきました。新しい年を迎える正月の

真帆ゆくや七福神の隅田川
野村 喜舟

風習や行事には、門松、おせち

料理、雑煮、初詣、七草粥などがありますが、健康や幸福がもたらされるように、先人のさまざまな知恵が込められています。

なかでも初詣は盛んで、有名な社寺は参拝者でにぎわっており、七福神詣も大変人気があります。

因みに、「七福神詣」は俳句の正月の季語になつていて、次のような句も詠まれています。

多聞寺に来て昏れにけり福詣

宮崎 利郷



「隅田川七福遊び」の版画

「隅田川七福遊び」の版画
比寿・大國神)と、6力所の社

福寺(布袋尊)、三間神社(恵比寿・大國神)と、6力所の社

正月の祝酒にほろよいの足を運

んで、一年の幸せを祈ることは、

何とも清々しい気分です。

それに次々と巡る社寺などで、

小さな福神像をいただいていく

のも、福が積もっていくよう

実感されます。しかも、帆掛け舟

に七つの福神像をのせ、巡り終

わった時に「宝舟」ができあが

るというのは、江戸風流の粹な

発想と言えましょう。

七福神ののつている宝舟の絵

の紙片を正月二日の夜に枕の下

に入れて眠ると、めでたい夢を

見ると言わっていました。

この絵には、「なかきよのと

おのねぶりのみなめさめなみの

もう一つ、家庭ではありません

るりふねのおと

のよきかな(永

き夜の遠の眠

りの皆目覚め

波乗り舟の音

の佳きかな)

という、上か

ら読んでも下

から読んでも

同じように読める回文などを書

いてあるものもありました。

そこで元日から二日にかけて、

この宝舟を描いた絵をお宝売り

が「お宝!お宝!」と町を売り

歩いたものでしたが、今では廃

れていました。

江戸庶民は二日の夜に見る夢

を初夢と呼び、この日に見る夢

に自分の幸せをかけたものです。

縁起のよい夢としては、「一富

士、二鷹、三なすび」と言つて、

入れ、無病息災、長寿富貴を祈

り、正月で疲れた胃を整えるた

めに、家族そろつて祝膳につい

たものでした。

春の七草については、向島百

花園(東向島3-18-3)で、年

末から1月7日まで「ジャンボ

七草籠」が展示され、また地植

の七草も楽しめます。

皆さんもこうした正月のさま

ざまな風習や行事の由来を再認

識し、正月の過ごし方を考え

みてはいかがでしょうか。

参考 「社会教育だより」

(墨田区教育委員会発行)



春の七草籠